日本の洋装化
150周年
シンポジウム

2022

11.12［土］
13:00-17:00

11.13［日］
13:00-17:00

京都芸術大学
智勇館
［BR13-14教室（1F）］

参加
無料

日本人にとっての
洋服とは何か

新しいファッションの
中心としての
京都の可能性

WHY WEAR WESTERN CLOTHES?

KYOTO UNIVERSITY OF THE ARTS
学校法人 瓜生山学園
京都芸術大学

日本が本格的に洋装を取り入れ始めて150周年を迎える本年、京都からその歴史を振り返り、現在ターニングポイントを迎えつつあるファッションの現在や今後のあり方について議論するシンポジウムを開催します。1871（明治4）年に明治天皇が「服制の更改の勅諭」を下して洋装を奨励し、翌1872（明治5）年11月12日、太政官布告により文官の大礼服が制定されました。以来、日本人の装いは、洋装化の道を辿ることとなりました。西洋的なファッションの価値観が行き詰まりを見せる昨今、本シンポジウムでは、日本人の装いの150年を振り返り、「洋装化により日本の服飾文化に何がもたらされ、何が失われたのか」という問いについて考えると同時に、日本のファッション文化の現在と未来を考える、ファッション文化研究のキックオフの機会としたいと思います。本シンポジウムは2日間かけて行います。1日目のテーマは「洋装化150年をふりかえる」とし、日本の服飾文化の来し方について、京都を中心とする関西在住の服飾研究者や関係者と共にふりかえります。2日目は、「日本のファッション文化の現在と未来」をテーマに、さまざまな立場の方を登壇者に迎え、議論を展開します。

洋装化150年をふりかえる

2022
11.12

13:00-13:05 学長挨拶
吉川左紀子（京都芸術大学学長）

13:05-13:10 シンポジウムの趣旨について
百々徹（大阪成蹊短期大学 生活デザイン学科教授）

13:10-13:30 BORO、世界をめぐる
辰巳清（シアター/アートプロデューサー 大阪成蹊大学芸術学部准教授）

13:30-13:50 明治皇后（昭憲皇太后）と洋装化へのチャレンジ
モニカ・ベーテ（中世日本研究所所長）

13:50-14:10 アパレル前史：京都のとある洋服商の紹介を兼ねて
安城寿子（服飾史家 阪南大学准教授）

14:10-14:25 休憩

14:25-14:45 田中千代と日本のファッション
本橋弥生（京都芸術大学教授）

14:45-15:05 ファッションデザイナーの時代
井上雅人（武庫川女子大学准教授）

15:05-15:25 洋装文化と衣装展
石関亮（京都服飾文化研究財団キュレーター）

15:25-15:40 休憩

15:40-16:40 登壇者によるディスカッション
［モデレーター：百々徹］

16:40-17:00 Q&A
［司会：本橋弥生］

日本のファッションの現在と未来

13:00-13:10 はじめに
百々徹（大阪成蹊短期大学 生活デザイン学科教授）

13:10-13:30 もうファッションは終わった
成実弘至（京都女子大学教授）

13:30-13:50 京都の染色はつながれていくのか。
越本大達（アート・ユニ 染め職人）

14:10-14:20 休憩

14:20-14:40 ホモ・サピエンスは意味を着るサルである
百々徹（大阪成蹊短期大学 生活デザイン学科教授）

14:40-15:00 衣服による芸術表現と社会・人つくり
眞田岳彦（衣服造形家/繊維文化研究家 女子美術大学教授）

15:00-15:20 ファッションの始まり
中里唯馬（ファッションデザイナー）

15:20-15:40 ファッション文化の向上にむけて
宮智泉（読売新聞東京本社編集委員）

15:40-15:55 休憩

15:55-16:45 登壇者によるディスカッション
［モデレーター：百々徹］

16:45-17:00 Q&A
［司会：本橋弥生］

2022
11.13

百々徹
（大阪成蹊短期大学 生活デザイン学科教授）

神戸ファッション美術館に21年間学芸員として勤務ののち、京都造形芸術大学准教授を経て、2018年より現職。服飾文化史やファッション現象のみならず、最近は、ホモ・サピエンスの着衣の起源とその進化について思索している。

安城寿子
（服飾史家 阪南大学准教授）

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程満期退学。博士（学術）。著書に『1964東京五輪ユニフォームの謎』（光文社新書、2019年）、共著にDressing Global Bodies（Routledge, 2020）、Exporting Japanese Aesthetics（Sussex Academic Press, 2020）などがある。

石関亮
（京都服飾文化研究財団キュレーター）

京都大学大学院修士課程修了。2001年より京都服飾文化研究財団に勤務。2011年よりキュレーター。2015年より、学芸課課長を兼務。展覧会「ドレス・コード?――着る人たちのゲーム」の共同企画の他、「Fashion in Colors」「ラグジュアリー」「Future Beauty」等のファッション展の企画・運営に参画。研究誌『Fashion Talks…』編集、現代ファッションを担当。

越本大達
（アート・ユニ 染め職人）

1997年、富山県生まれ。染め職人。大学進学をきっかけに京都での生活を開始。在学時の就職活動中に染色家・西田清氏に出会い、染め職人の仕事に魅了され、弟子入りを志願。現在も染色工房「アート・ユニ」にて活動中。

中里唯馬
（ファッションデザイナー）

1985年生まれ。2008年、ベルギー・アントワープ王立芸術アカデミーを卒業。2015年に「株式会社YUIMA NAKAZATO」を設立。2016年7月にはパリ・オートクチュール・ファッションウィーク公式ゲストデザイナーの1人に選ばれ、コレクションを発表。その後も継続的にパリでコレクションを発表し、テクノロジーとクラフトマンシップを融合させたものづくりを提案している。

辰巳清
（シアター/アートプロデューサー 大阪成蹊大学 芸術学部准教授）

株式会社アミューズにてコンサート、演劇・ミュージカル、美術展など30年間で5000以上の公演を演出・プロデュース。国内外で大型プロジェクトの経験多数。文化庁専門委員など、芸術文化による地域活性化の社会活動も行っている。今年4月から現職。

本橋弥生
（京都芸術大学教授）

2003年の国立新美術館設立準備室の創設以来、2022年3月まで国立新美術館に勤務。担当した主な展覧会に、「MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事」（2016年）、「ミュシャ展」（2017年）、「ファッションインジャパン 1945-2020 流行と社会」展（2021年）などがある。2022年度より現職。

成実弘至
（京都女子大学教授）

ロンドン大学大学院修了。株式会社パルコ、京都造形芸術大学准教授を経て、現職。社会学、文化史の観点からファッションを考察する。著書に『20世紀ファッションの文化史』、編著に『コスプレする社会』、共編著に『ファッションを社会学する』など。

眞田岳彦
（衣服造形家/繊維文化研究家 女子美術大学教授）

衣服造形家として銀座メゾン エルメスフォーラム・神戸ファッション美術館等で展覧会、新潟・愛知等の伝統的繊維地域の人々との地域プロジェクト、神戸・熊本等の大震災被災地で心の傷の緩和支援、次世代育成の無償私塾開講等、衣服による芸術活動を通して社会・人つくりに取り組む。

宮智泉
（読売新聞 東京本社編集委員）

東京生まれ。国際基督教大学を卒業後、1985年、読売新聞東京本社に入社。生活部長、編集局次長などを経て、編集委員。長年、国内外のファッションを取材。著書に「服を作る―モードを超えて」（中央公論新社刊）。

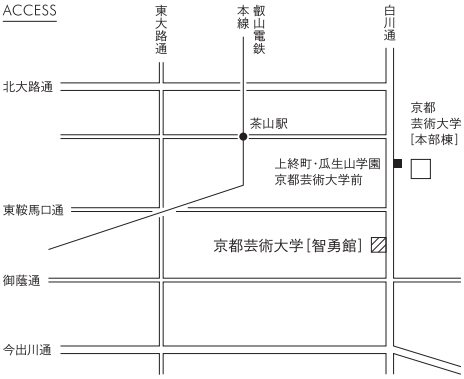
モニカ・ベーテ
（中世日本研究所所長）

大谷大学教師を退職（2011年）後、中世日本研究所の所長として、尼門跡寺院関連の調査、研究、宝物の修復にかかわっている。芸能や染織についての数多くの出版の中に「織り糸が語る内と外～昭憲皇太后大礼服研究修復復元プロジェクトの現状」（『神園』明治神宮、2020年）もある。

井上雅人
（武庫川女子大学准教授）

東京大学人文社会系研究科博士課程満期退学。文化服装学院II部服装科卒。コトバトフク運営スタッフ。著書に『洋服と日本人 国民服というモード』（廣済堂出版）、『洋裁文化と日本のファッション』（青弓社）、『ファッションの哲学』（ミネルヴァ書房）など。

ACCESS



〒606-8252 京都府京都市左京区北白川上終町1 / 075-791-9122（代表）
［電車］叡山電車（京阪出町柳駅乗りかえ）茶山駅下車より徒歩約12分
［バス］上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前より徒歩2分

企画：百々徹 本橋弥生　デザイン：塚野大介（Meander）